

令和2年10月28日

## 新型コロナ感染症に伴う臨時休業における児童生徒の健康課題等に関する調査（養護教諭対象）

### —第2回調査 集計報告—

戸部秀之 埼玉大学

アンケートにご回答くださいました全国の養護教諭の皆様、コロナ禍の大変な状況の中でのご協力、ありがとうございました。

令和2年3月に実施した、全国一斉休校開始当初の第1回目のアンケート調査では、1,000名を越える全国の養護教諭から、児童生徒の健康安全や学校再開に向けた懸念事項等について意見を頂きました。第2回となる本調査では、長期の臨時休業を経て学校が再開した後、養護教諭から見て実際に生じている児童生徒の健康問題や、学校の感染拡大防止対策の課題について調査し、令和2年7月下旬から9月上旬の調査期間に1,000名近くのご回答を頂きました。刻々と変化する状況の中ではありますが、現状を集約できたと思います。ご協力いただいた方々には、心からお礼申し上げます。

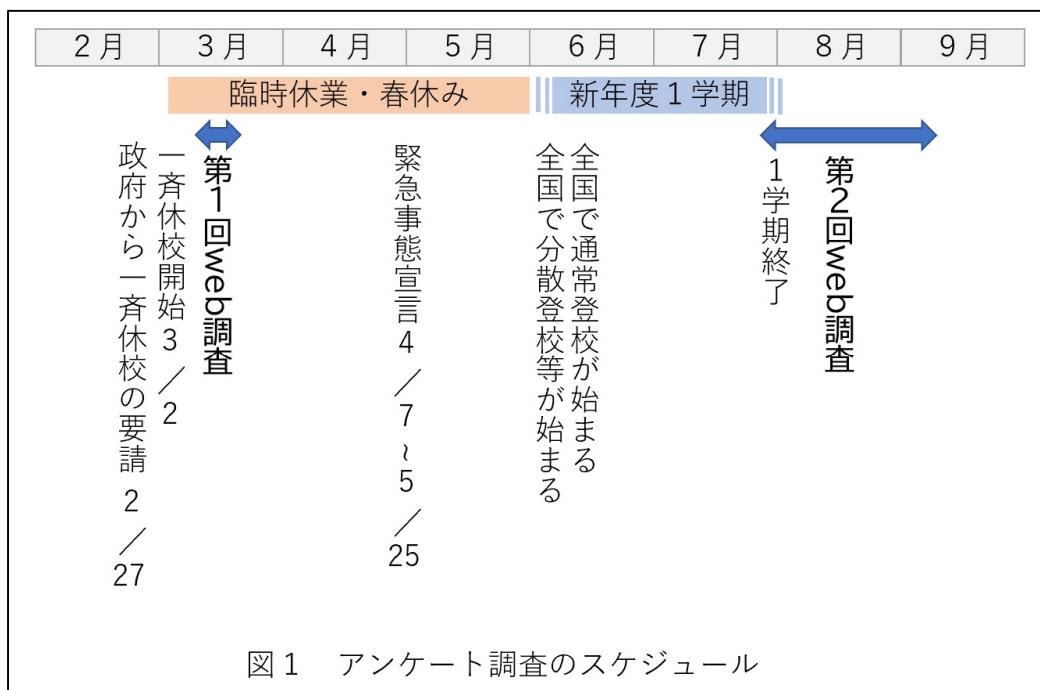
本アンケート調査の特徴は、選択式の質問で全体の傾向を把握すると同時に、記述式の質問により、さらに具体的に掘り下げている点です。記述式の質問では、養護教諭の生の声が多数寄せられました。本報告では、記述内容を読み解いて集計データに加えて紹介します。なお、全ての記述内容について別に一覧で紹介します。必ずしも多数意見でなくても重要な視点が多くあり、紹介しきれなかった意見もあります。是非ご参照頂き、課題を共有できればと思います。

開始当初予定していた調査期間を延長したため、集計報告も遅れることとなりましたが、調査の目的の一つである、養護教諭をはじめとする学校保健関係者との情報共有の一助となれば幸いです。

## 【調査スケジュール、回答者、学校規模、地域等について】

令和2年7月下旬から同9月上旬にかけて第2回 web 調査を行った。

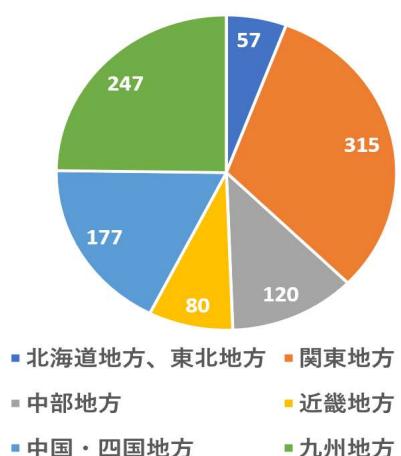
有効回答 996 名を対象に集計を行った。第1回、および、第 2 回の調査スケジュールは下記のとおりである。



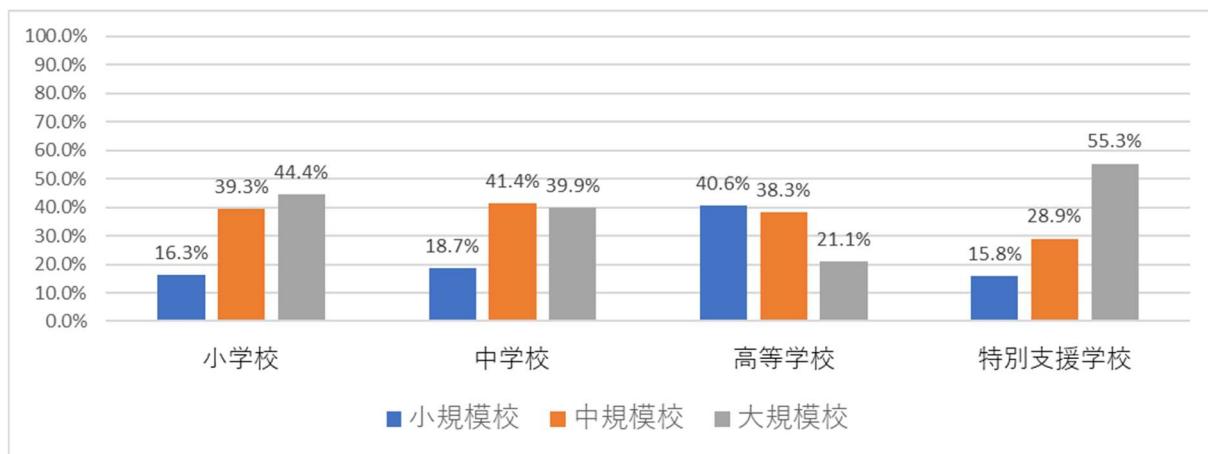
### ○第2回調査の回答者(養護教諭)について(校種、地方)

校種	人数	%
小学校	546	54.8
中学校	276	27.7
高等学校	133	13.4
特別支援学校	41	4.1
合計	996	100.0

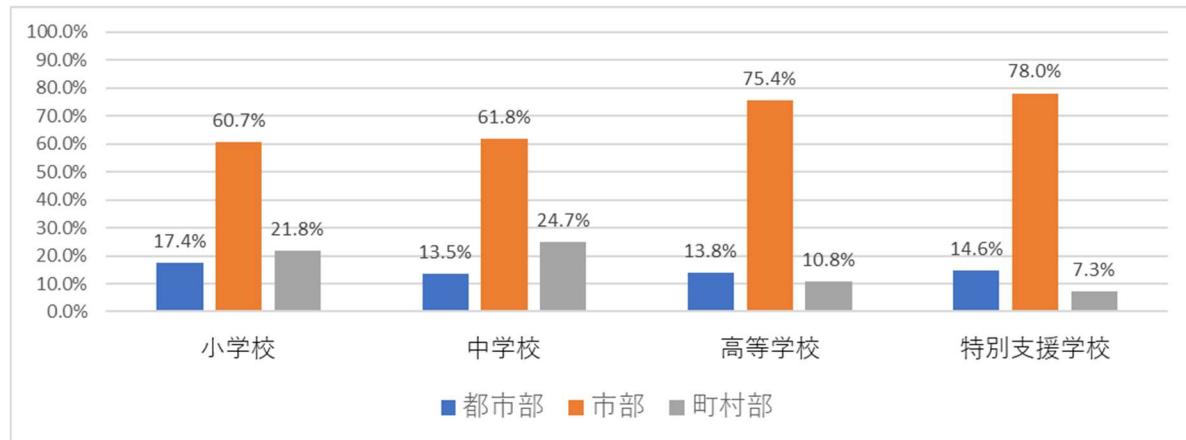
中学校には、義務教育学校、小中併設校等、8名を含む。  
高等学校には、中高一貫校等、21名を含む。



## ○回答者が勤務する学校の規模



## ○回答者が勤務する学校がある地域



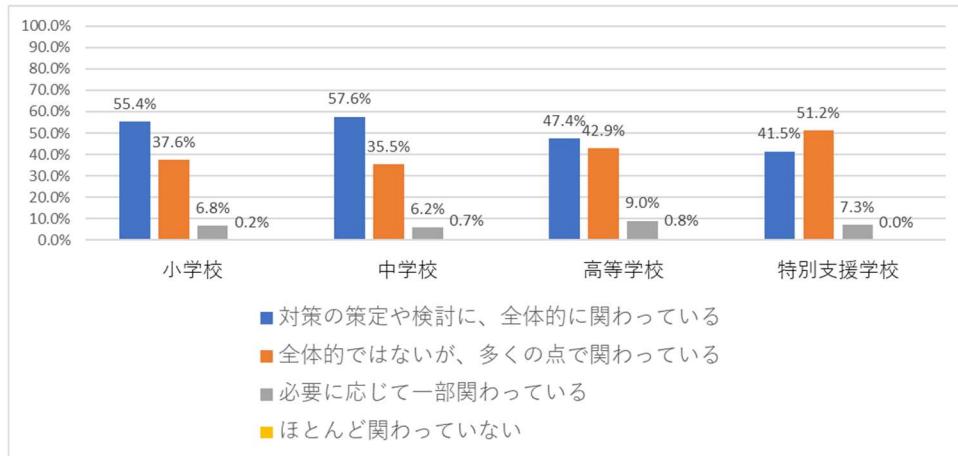
**【参考】第1回調査(令和2年3月)時点における、養護教諭の主な心配・懸念事項**

第1回目の調査における養護教諭の心配・懸念に関する主な項目について（人数、%）

項目	特に心配・懸念はない	心配・懸念がある	強い心配・懸念がある	計	
児童生徒の健康・安全に関する心配・懸念	人が密集する場所に外出することによる感染の可能性	51 3.9%	756 57.9%	498 38.2%	1305 100.0%
	手洗い、マスク着用、換気などの感染予防ができない可能性	141 10.9%	884 68.1%	274 21.1%	1299 100.0%
	休業中、家庭や外出先での事故や犯罪被害	268 20.6%	813 62.3%	223 17.1%	1304 100.0%
	生活習慣の悪化（睡眠習慣の悪化、食習慣・栄養面の悪化、歯みがき習慣の低下など）	26 2.0%	291 22.4%	985 75.7%	1302 100.0%
	運動不足による影響（肥満、体力低下、発育発達への影響など）	46 3.5%	382 29.3%	875 67.2%	1303 100.0%
	ゲームやインターネットなどの過剰使用の影響（依存、昼夜逆転など）	19 1.5%	200 15.4%	1083 83.2%	1302 100.0%
	新型コロナ感染による受診控えによる病気の発見の遅れや治療の遅れ	376 28.9%	770 59.1%	156 12.0%	1302 100.0%
	家庭環境が複雑、被虐待の可能性があるなど、家庭に課題がある児童生徒の状況	140 10.7%	520 39.9%	643 49.3%	1303 100.0%
	親の精神状態の悪化による児童生徒への影響	230 17.7%	686 52.8%	384 29.5%	1300 100.0%
	学校がない、友だちと会えない、活動の制限などによる児童生徒のストレスや精神状態	88 6.8%	578 44.5%	632 48.7%	1298 100.0%
学校再開に向けた懸念	教職員の不安、ストレス、不満など（見通しのなさ、対応への負担、意識の違いなど）	284 21.8%	757 58.1%	262 20.1%	1303 100.0%
	児童生徒の健康状態をどのように把握し、体調不良者に対応したらよいか	139 10.7%	646 49.6%	518 39.8%	1303 100.0%
	体調不良の教職員の把握と対応のしかた	242 18.6%	720 55.2%	342 26.2%	1304 100.0%
	消毒用アルコール、マスクなどの衛生資材の調達	83 6.4%	280 21.4%	944 72.2%	1307 100.0%
	学校生活管理指導表等の提出遅れ（受診控えによる）	329 25.2%	704 53.9%	274 21.0%	1307 100.0%
	来年度の健康診断等、学校保健活動の実施や計画について	116 8.9%	500 38.3%	688 52.8%	1304 100.0%
	海外から（または海外に帰国中）の児童生徒の受け入れ	375 28.9%	517 39.8%	407 31.3%	1299 100.0%

## 【勤務校における新型コロナウイルス感染症対策の課題について】

○あなたは、校内の新型コロナウイルス感染防止対策の策定や検討に、養護教諭としてどのように関わっていますか。



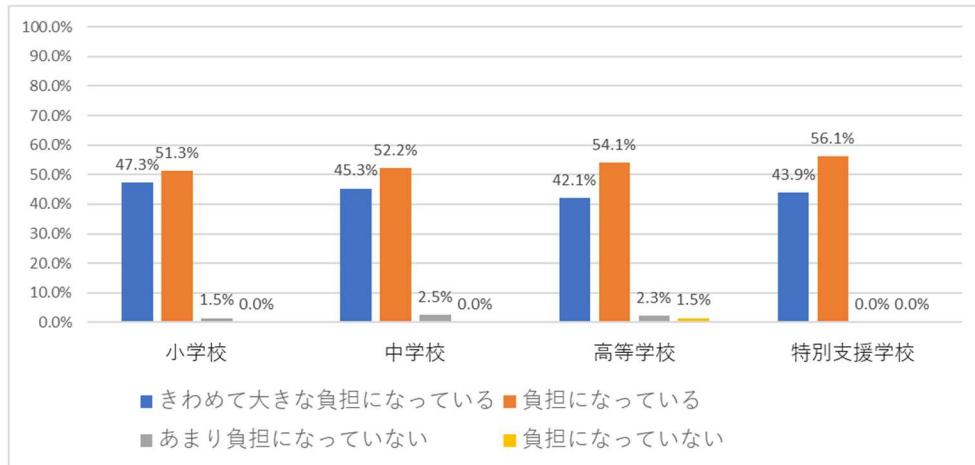
校内の新型コロナ感染防止対策の策定や検討に、養護教諭としてどのように関わっているかを質問した。図には校種別の結果を示す。

全校種を合わせると、「全般的に関わっている」(54.4%)、「全般的ではないが、多くの点で関わっている」(38.3%)であり、回答者の9割が全般的、または多くの点で学校における新型コロナ感染症対策の策定に関わっている。

自由記述からも、頭を悩ませながらも、管理職と連携して学校の感染防止対策を中心となって進め、専門性を発揮している養護教諭の姿を垣間見ることができる。

一方で、自由記述には、養護教諭の悩みも数多く述べられていた。学校の感染防止対策を養護教諭に任せきりになっている学校が少なくない状況もある。教職員への提案も説明も養護教諭からの発信となり、教職員への説明や反論に翻弄される養護教諭の姿も浮かび上がった。「効果があるのか。」「いつまでやるのか。」教職員からの否定的な反応や厳しい意見も少なくない。すでに大きな負担がある教職員にさらに対応を依頼する心苦しさも加わる。養護教諭が健康の専門職と言っても万能ではなく、特に未知の状況においては、明確な根拠を持って判断や説明ができないこともある。このような未曾有の事態であるときこそ、学校経営における責任と役割を再確認し、組織として対応することが大切だろう。

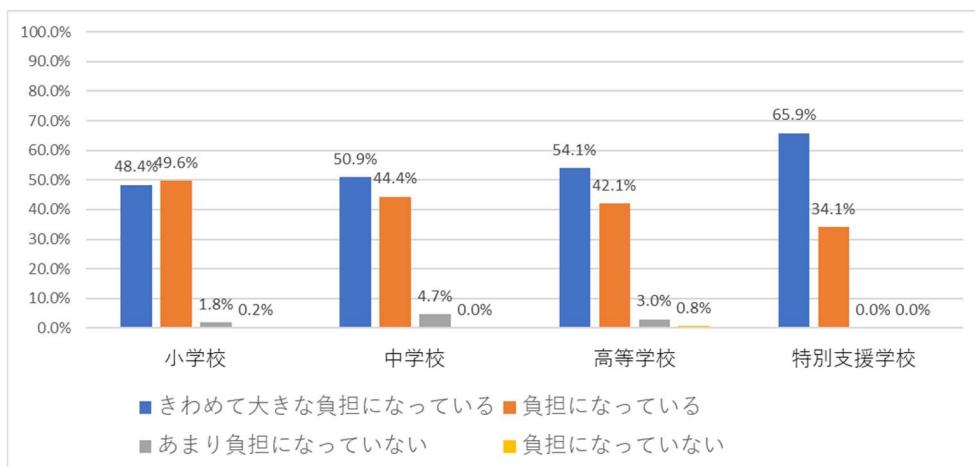
○あなたの学校の先生方にとって、学校における新型コロナウイルス感染防止の取組はどの程度の負担になっていると思いますか。



校内の新型コロナ感染防止対策が教職員にどの程度負担になっているかを質問した。図には校種別の結果を示す。

全校種を合わせると、「きわめて負担」(45.9%)、「負担となっている」(52.1%)、「あまり負担になっていない」(1.8%)、「負担となっていない」(0.2%)、であり、「きわめて負担」と「負担となっている」を合わせると 98.0% に上る。

○養護教諭のあなた自身にとって、学校における新型コロナウイルス感染防止対策はどの程度の負担になっていますか。



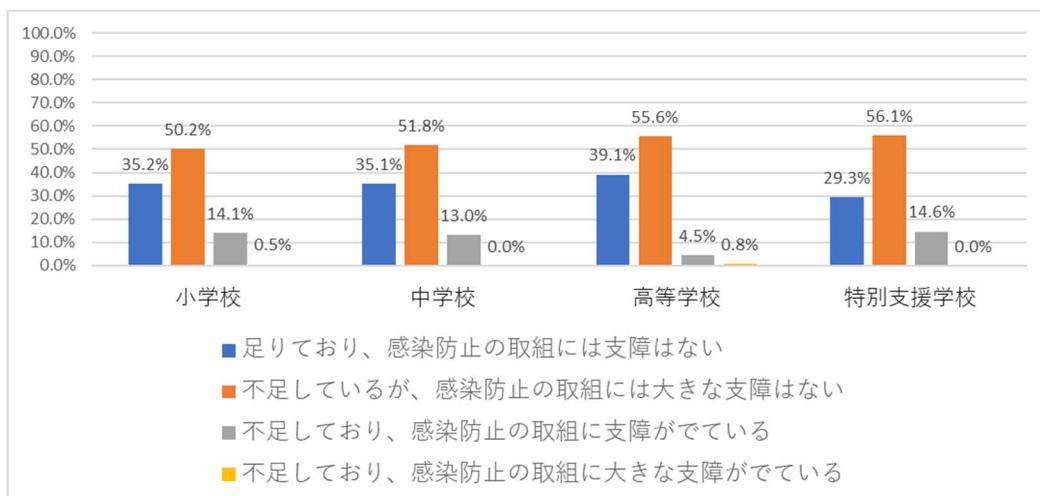
図には校種別の結果を示す。全校種を合わせると、「きわめて負担」(50.5%)、「負担となっている」(46.5%)、「あまり負担になっていない」(2.7%)、「負担となっていない」(0.2%)、であり、「きわめて負担」と「負担となっている」を合わせると 97.0% に上る。

朝の入念な健康観察や、子供の「密」対策、給食の配膳、放課後のトイレ掃除、勤務時間外にまで及ぶ毎日の消毒など、新型コロナ対策で教職員に多くの業務が加わった。休み時間の子供の「密」回避は大変難しいという意見が見られる。調査の自由記述で特に多いのが、毎日の消毒作業とトイレ掃除が先生たちの大きな負担になっている現状である。

教職員が元気でなければ、よい教育を実現することは難しい。過剰な負担と疲弊は、緊張感や意識の低下を引き起こし、さらには、対策への否定的な感情が生じる可能性すらある。それは、教員間の意識の温度差や人間関係の摩擦にもつながり、一層のストレスや疲弊を引き起こすことになる。こういった教員間の意識の温度差や人間関係の悪化は、自由記述にも多く語られている。

新型コロナ感染の終息が見えない現状で、皆が前向きに協力するためには、過剰な負担を避け、「持続可能な対策」を工夫する必要がある。

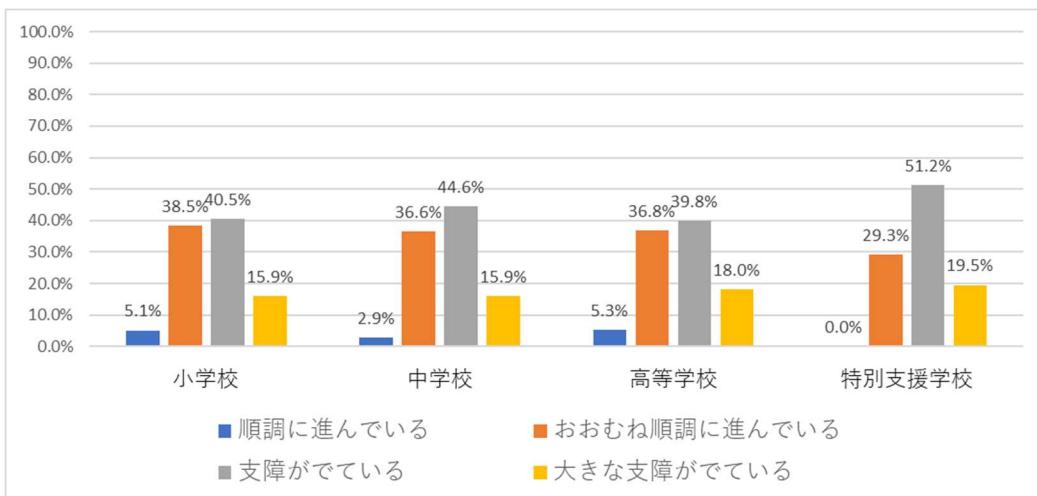
## ○消毒用アルコールやマスク等の学校の保健資材について、最も近いものをお選びください。



1回目の調査の時点では、7割を超える養護教諭が消毒用アルコール、マスクなどの衛生資材の調達に強い懸念・不安を示していた。

2回目の調査結果について、図に校種別の結果を示す。全校種を合わせると、「足りており、感染防止の取り組みに支障はない」(35.4%)、「不足しているが、感染防止の取り組みには大きな支障はない」(51.6%)であり、概ね支障はないという回答が 87.0%である。ただし、1割余りの学校では支障が出ている状況である。自由記述を見ると、今後の感染の拡大状況によっては、再び不足する可能性を心配する声も見られた。

○定期健康診断など、今年度の主要な保健行事の計画・調整・実施等について、最も近いものをお選びください。



1回目の調査の時点で、5割を超える養護教諭が強い懸念・不安が示したこととして、「健康診断等、学校保健活動の実施や計画」が挙げられる。

2回目の調査結果について、図に校種別の結果を示す。全校種を合わせると、「順調に進んでいる」(4.3%)、「おおむね順調に進んでいる」(37.3%)、「支障が出ている」(42.0%)、「大きな支障が出ている」(16.4%)であり、58.4%が支障が出ていると述べている。

多くの養護教諭が、健康診断でクラスターが発生することに強い不安を抱いている。また、度重なる健康診断の延期により、再計画・再調整で心労が重なっている様子が伺える。自治体や行政からの指示が二転三転する中、健康診断の流れや方法が学校の判断に任せられることが多く、手さぐりで進めざるを得ない状況が読み取れる。時間もかかり、大きな負担となっているとの声が多い。

健康診断の日程調整が難航している状況も伺える。定期健康診断の日程を2学期以降に移動する学校が多い中、就学児健康診断をはじめ、他の学校行事等との日程調整や、学校医との日程調整が難航している学校が多い。学校医から、新型コロナ感染症が落ち着くまで健診や来校を見合わせたいとの意見があるなど、健診の見通しがつかない学校もみられる。

健康診断以外の保健行事や保健教育にも影響が出ている。歯科保健指導、薬物乱用防止教室、喫煙防止教室、性教育など、外部教師を招く集会が中止になったり、学校保健委員会が中止になったりした学校も多い。

保健室の機能にも少なからず影響が見られる。特に、体調不良者を待機させる別室を用意できない学校では、新型コロナ感染の可能性を否定できない体調不良者を保健室に待機させることがあり、保健室におけるけがの手当てや保健室登校への対応、健康相談等の機能に支障が出ているケースが見られる。別室

を用意できた場合でも、保健室と別室の両方を一人の養護教諭が対応せざるを得ないこともある。

さらに、自由記述には、「体調不良者と関わる機会が多いため、自分自身(養護教諭)が感染することや、感染を広げてしまうことへの不安がある」との意見もある。校内では、自分自身の感染リスクについて、養護教諭自身からは声を上げにくい状況があるかもしれない。養護教諭自身の健康に加え、学校に一人か二人しかいない養護教諭が感染した場合の学校全体への影響について周囲が理解し、養護教諭の感染リスクを分散する工夫が必要であろう。

○前の質問で、「支障が出ている」または「大きな支障が出ている」を選んだ方に伺います。どのような支障が出ていますか。具体的にお書きください。(自由記述回答)

記述回答の内容は『定期健康診断等、保健行事等への具体的な支障（記述）』のページをご参照ください。

○その他、あなたの学校の新型コロナウイルス感染防止対策において、課題や困難なことがありましたらお書きください。(自由記述回答)

記述回答の内容は『感染防止対策における課題や困難（記述）』のページをご参照ください。

## 【児童生徒等の健康課題について】

○あなたの学校では、新型コロナウイルス感染症について、次のケースはありましたか。（複数回答可）

- ・児童生徒自身に、新型コロナに感染したケースや濃厚接触者になったケース。
- ・児童生徒と同居の家族に、新型コロナに感染したケースや濃厚接触者になったケース。
- ・教職員に新型コロナに感染したケースや濃厚接触者になったケース。

表 各項目に「ある」と回答した養護教諭の割合

	小学校	中学校	高等学校	特別支援学校
児童生徒自身	5.5%	7.6%	19.5%	4.9%
児童生徒と同居の家族	19.8%	24.6%	45.1%	14.6%
教職員	2.2%	2.5%	3.0%	2.4%

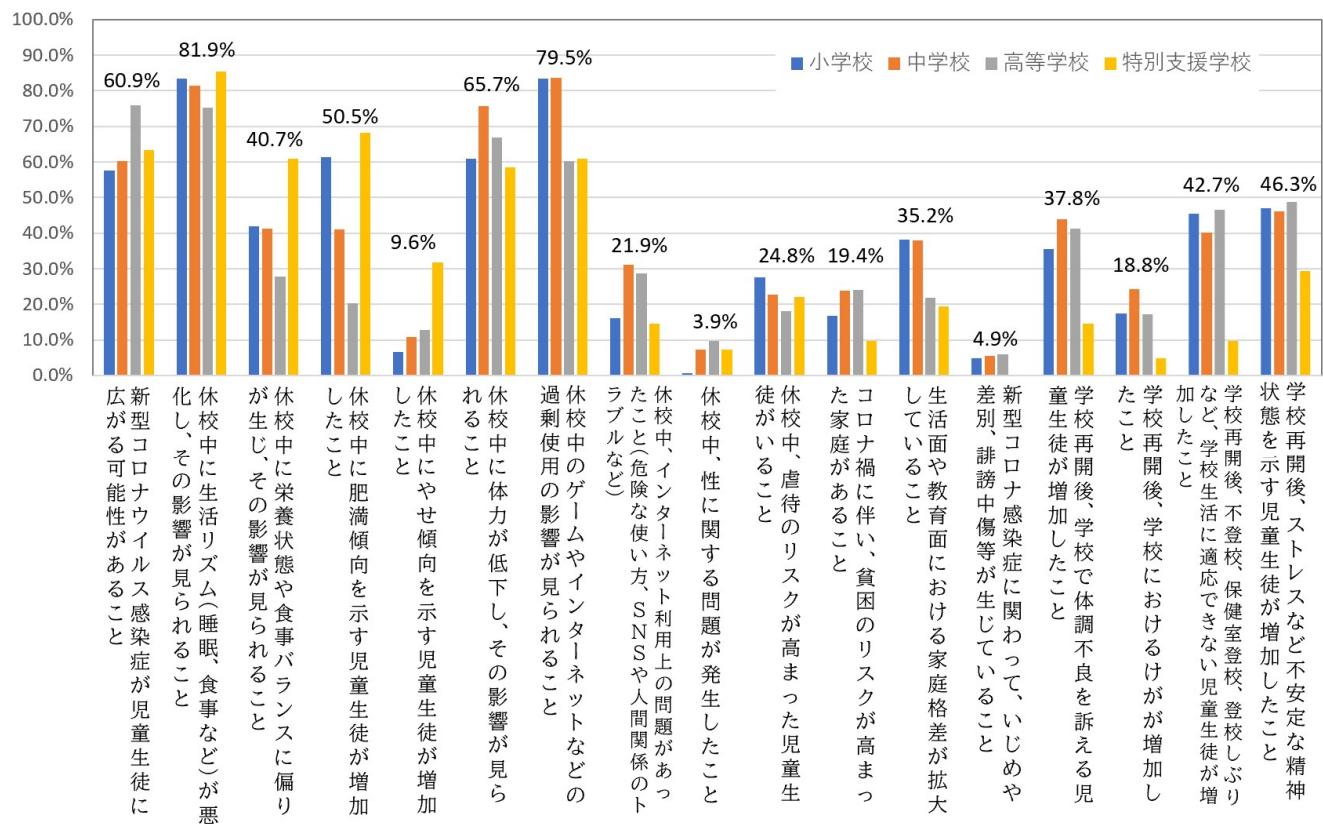
調査の時点(7月下旬から9月上旬)で、「児童生徒自身」に「感染または濃厚接触者になったケースがある」のは全校種を合わせると 7.9 %である。校種別(表)では、高等学校が多い傾向が見られる(19.5%)。

「児童生徒と同居の家族」にそのようなケースがあったのは全校種では 24.3%だった。高等学校では高率(45.1%)だった。

このように、児童生徒や同居の家族内に感染者や濃厚接触者がいる場合があり、家庭内で感染する可能性があると考える必要がある。子供は感染しても無症状のケースが多いことも指摘されている。後述するように、「新型コロナウイルス感染症が児童生徒に広がる可能性」を問題視している養護教諭が 60.9%おり、校内に無症状の感染者がいる可能性を踏まえた対応が必要であろう。家庭における健康観察などの対策の重要性が確認できる。

関連して、感染者や濃厚接触者へのいじめや誹謗中傷についても注意が必要である。後述するように、4.9%の養護教諭が「新型コロナ感染症に関わって、いじめや差別、誹謗中傷等が生じている」と答えている。児童生徒や家族が感染者や濃厚接触者となった人たちに向けられる可能性が高く、母数が限られていることを踏まえると、この割合は必ずしも低いとは言えない可能性がある。

○新型コロナウイルス感染症に伴う休校中や学校再開後の、あなたの学校の児童生徒の状況についてお答えください。あなたが問題と捉えていることはどのようなことですか。（複数回答可）



養護教諭が問題と捉える児童生徒の健康課題 ※図中の数値は全体のパーセント

結果より浮かび上がった状況について、自由記述回答の内容も踏まえて児童生徒に生じた健康問題の傾向を述べる。なお、「児童生徒への感染の拡大」については、60.9%が問題視している。

#### ・ゲーム・ネット漬けと生活習慣の悪化等

新型コロナ対策の長期の臨時休業の間に児童生徒が陥ったのが、「ゲーム・ネットの過剰使用」と「生活習慣の悪化」である。全国一斉休校の開始直後に行った第1回の調査では、きわめて多くの養護教諭がこれらに対して心配と懸念を示していた。2回目の調査では、80~82%の養護教諭が、休校中の「生活習慣の悪化」や「ゲームやインターネットなどの過剰使用」の影響が、実際に生じていることを問題視している。なお、追加の質問として、中でも「とりわけ大きな問題だと思っていること」を記述してもらったが、もっと多かったのが生活習慣の悪化に関わることであり、130名近くの記述内容に触れられていた。インターネットやゲームに関する健康問題についても80名程がとりわけ重大な問題として挙げていた。

時間を持て余し、エネルギーを発散できない子供が昼夜ゲームやネットに熱中し、画面から出るブルーライトの影響もあって睡眠のリズムが乱れる。自律神経のバランスも乱れて、午前中は元気がなく、夜になると元気が出るという悪循環に陥った可能性が考えられる。WHO が「ゲーム障害」を疾患として認定したように、のめり込むと改善には専門的な治療が必要になる場合もある。学校再開とともに、生活リズムが回復することも期待していたが、調査の自由記述からは、回復した子供ばかりではなく、学校再開後も戻らず、ゲーム漬けの影響から抜け出せない子供も少なくない様子が伺える。

また、多数の養護教諭(65.7%)が「休校中の体力低下」とその影響を指摘しており、特に中学校に限ると 75.7%にも及んでいる。体力低下自体の問題もちろんだが、体力低下が「体調不良を訴える児童生徒の増加」(37.8%)や、「学校におけるけがの増加」(18.8%)にもつながっている可能性がある。

加えて、「肥満傾向の増加」を多くの養護教諭(50.5%)が指摘している。特に小学校と特別支援学校では多く、それぞれ 61.4%と 68.3%に及ぶ。生涯の健康にも関わる問題であり、熱中症のリスクにもつながる問題である。

また、自由記述では、子供の視力低下について大変多くの指摘があった。視力は、学校保健統計調査報告書を見ても低下が著しい項目である。コロナ禍で拍車がかかった可能性がある。

肥満児の増加も、視力低下も、ゲーム・ネットの過剰使用や生活習慣の乱れ、運動不足との関係が深いと考えられる。

#### ・コロナ禍と家庭の状況

1回目の調査では「家庭環境、被虐待など、家庭に課題がある児童生徒の状況」について、多くの心配・懸念があることが示されていた。

それを受け、2回目の調査では、虐待や貧困のリスク、家庭の格差の状況について質問項目に加えた。回答者の学校の児童生徒について、実際に「休校中、虐待のリスクが高まった児童生徒がいる」とした回答が全体の 24.8%であり、小学校では他の校種より若干多い傾向(27.7%)が見られた。また、「コロナ禍で貧困のリスクが高まった家庭がある」とした人は全体の 19.4%、「生活面や教育面における家庭格差が拡大している」とした人は全体の 35.2%であった。

「家庭環境の悪化」「虐待」「家庭の格差」「貧困」など、家庭に関わる問題の悪化を「とりわけ大きな問題」として記述回答に挙げていた人は 40 名程に上った。コロナ禍において、家庭環境の変化、虐待、貧困のリスクの高まりや格差の拡大を養護教諭が感じ取っていることが分かる。

保護者の在宅勤務が増え、家族が自宅で一緒に過ごす時間が増えるなど、家庭内の関係性の変化も重要である。仕事や家計にも影響が出ている家庭や、大人も子供もストレスフルな状況にあることが報道されることもある。コロナ禍が子供に及ぼす影響を考える際に、家庭の状況は注意深く見守る必

要がある。これまで以上に、家庭の状況が子供の健康や心身の成長に影響する可能性を踏まえることが大切であろう。

#### ・子供の心への影響

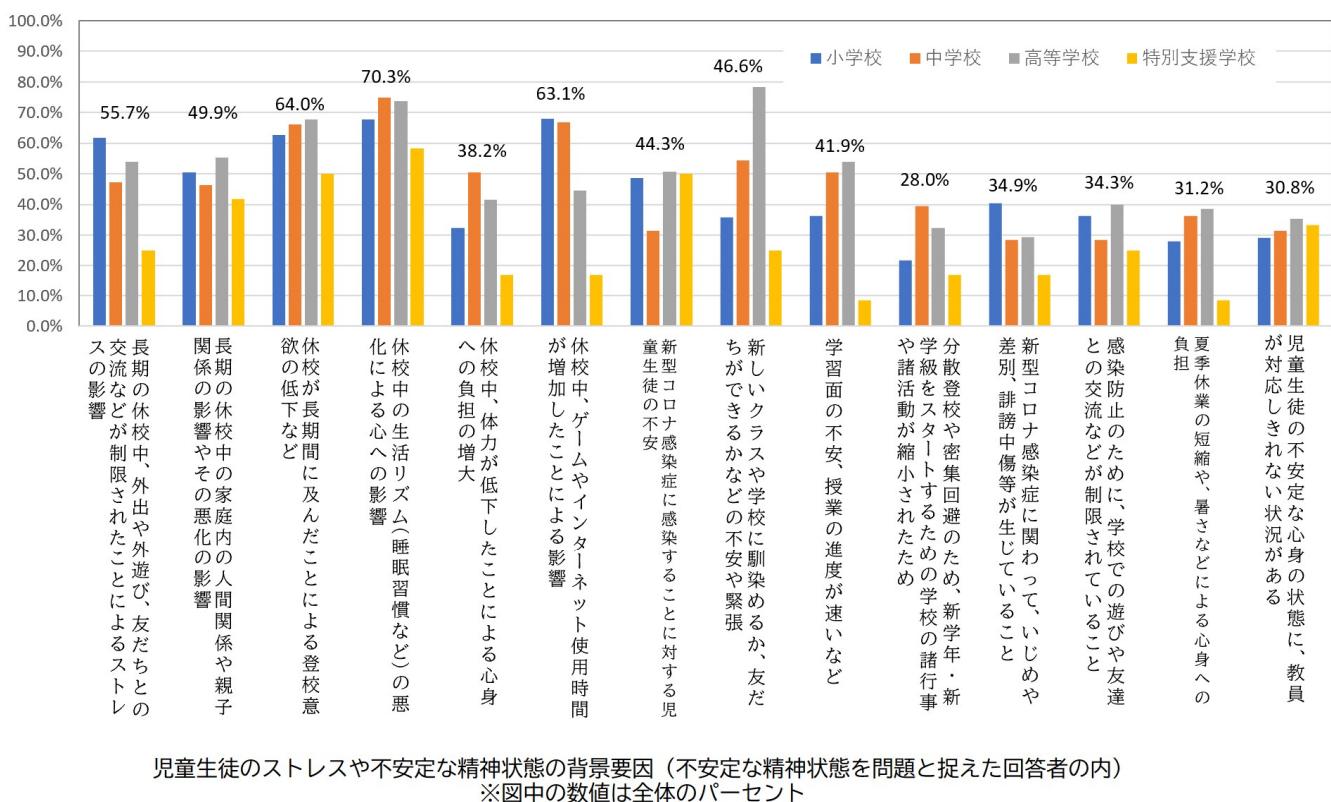
コロナ禍において子供のストレスを心配する声が聞かれる。1回目の調査では、多くの養護教諭が、臨時休業中の「学校がない、友達と会えない、活動の制限などによる児童生徒のストレスや精神状態」を心配していた。では、実際にコロナ禍は子供たちの「心」にどのような影響を及ぼしたのだろうか。

まず、子供たちの多くが学校再開を喜んでいることは確かである。一方で、2回目の調査からは、42.7%の養護教諭が、「学校再開後、不登校、保健室登校、登校しぶりなど、学校生活に適応できない児童生徒が増加した」と回答し、46.3%の養護教諭が「学校再開後、ストレスなど不安定な精神状態を示す児童生徒が増加した」と答えている。「学校生活に適応できない」もしくは「不安定な精神状態」のいずれかを挙げた養護教諭の割合は、全体の 60.7%に上っている。この傾向は、小学校、中学校、高等学校間に明確な校種差は見られなかった。長期に及ぶ臨時休業を実施していない学校も比較的多く含まれる特別支援学校では低めに抑えられていた。

なお、「とりわけ大きな問題」として、児童生徒のメンタルヘルスや心の状況について記述回答で挙げていた人は 110 名程、不登校や登校しぶりなど、学校への不適応に関わる記述についても 110 名程であった。前述の生活習慣の問題に並んで、コロナ禍における児童生徒の中心的な健康問題として、多くの養護教諭が心の問題に注目していることが分かる。

なお、重要なことは、「生活習慣の悪化」、「ネット・ゲーム使用」、「体力低下」、「肥満児の増加」、「視力低下」、「けがの増加」、「体調不良」、「精神的な不安定」、「学校への不適応傾向」など、多くの健康問題は、決して独立して存在しているのではなく、深く関わり合っていることである。

○『学校再開後、ストレスなど不安定な精神状態を示す児童生徒が増加したこと』にチェックされた方に伺います。『児童生徒のストレスや不安定な精神状態』の背景にはどのような要因があると思いますか。(複数回答可)



では、不安定な精神状態の背景にはどのような要因があるのだろうか。以下、「不安定な精神状態を示す児童生徒が増加した」と回答した養護教諭を100%として結果を見ていくことにする。

多く挙がった要因は、「休校中の生活リズム(睡眠習慣など)の悪化」(70.3%)や「休校中のゲームやインターネット使用時間が増加」(63.1%)、「長期の休みによる登校意欲の低下」(64.0%)である。前述の健康問題の中心であった生活面の課題が子供の心にも影響していることが考えられる。さらに、「休校中の行動制限(外遊びや交流など)」(55.7%)、「休校中の家庭内の親子関係等」(49.9%)の心への影響が挙げられる。「体力低下による心身への負担」(38.2%)も4割近くが挙げている。以上の要因は、いずれも休校中の影響がその後も継続している点に注意が必要である。コロナ禍で変調を来たした子供の生活や心身は簡単には回復せず、その後も子供の心に影響していると思われる。

34.9%の養護教諭が指摘しているように「学校での遊びや友達との交流などの制限」も不安定な精神状態の背景要因として重要である。記述回答からも、小学生では、とりわけ、「遊びや関わりの制限・生活の変化が心に影響」していると捉えている養護教諭が多く、約 50 名から関連した意見が聞かれ

た。ウィズコロナの学校では、「密」にならないように友だちとの関わりは制限される。遊びについても、友達と間隔をとり、接触を避け、会話を控えるなど、多くの制約がある。「近づくな、しゃべるなというのは、子供の育ちに影響するのではないか。」自由記述にあった養護教諭の率直な声である。

なお、学校段階によって背景要因には傾向が見られ、中学生では、新しいクラスや人間関係の構築における不安や、行事などの中止・縮小による意欲の低下等が影響しているとの見方が多く見られた。小中高とも共通に、家庭の課題については、比較的多くの声が挙がっていた。(記述回答より)

また、44.3%の養護教諭が挙げているように、「新型コロナ感染症に感染することに対する不安」も子供の不安定な精神状態の要因であることも理解しておく必要がある。感染への不安や自身の体調の変化を過剰に心配するなど、子供たちも感染への不安を持っているのである。

その他、記述回答では、学習面の不安や、マスク着用の負担もストレスの要因として挙げられていた。加えて、学校での心の支援の充実も大切である。「不安定な心身の状態に、教員が対応しきれない状況がある」と指摘している養護教諭が 30.8%見られる。1回目の調査にも「新型コロナ対応で教員全体が多忙になり、学校不適応や心の問題など、丁寧な支援が必要な部分に手が回らなくなる恐れがある」との懸念の声が見られたが、実際にそのような状況が生じている実態が伺える。

なお、これらの要因が互いに深く関わりながら、子供たちの「不安定な精神状態」に影響していることを、多くの養護教諭が記述回答で指摘していることについて、あらためて強調したい。

長引くコロナ禍のなかで変わっていく社会や学校、家庭環境のなかで、私たち大人は、子供の声に耳を傾け、子供たちが置き去りになっていないか、確かめながら進んでいく必要があるだろう。

○あなたが『児童生徒の健康問題』として、とりわけ大きな問題と思われることについて、具体的にお書きください。(記述回答)

記述回答の内容は『**とりわけ大きな児童生徒の健康問題(記述)**』のページをご参照ください。

○あなたがとりわけ『児童生徒のストレスや不安定な精神状態』と関連が深いと思われる要因について、具体的にお書きください。(記述回答)

記述回答の内容は『**心の問題ととりわけ関連深い背景要因(記述)**』のページをご参照ください。

以上、第 2 回 web 調査から見られた傾向を報告します。学校における対策の課題、および、児童生徒の健康課題を共有するとともに、今後の対策を検討するうえでの一助としていただければ幸いです。

最後に、調査にご協力下さった養護教諭の皆様に重ねてお礼申し上げます。